

皮膚科におけるレーザーとラジオ波の使い分け

柴田 真一 (SSクリニック 皮膚科・美容外科)

はじめに

皮膚科領域の対象疾患は幅広いことが特徴です。今回は症例ごとに、レーザー、高周波ラジオ波メス（サージトロン）のどちらを使用するかについて、自身の治療経験から見解を述べます。

高周波ラジオ波メスが優れているケース

- ・比較的大きな皮膚腫瘍
- ・病理組織検査に提出したい皮膚腫瘍
- ・経験的にラジオ波メスでの治療経過がよい皮膚腫瘍（静脈湖など）
- ・清潔操作が必要な症例

臨床症例

1) 47歳 女性、顔 色素性母斑

メスで切除して、縫縮すると瘢痕を形成する可能性があるため、炭酸ガスレーザーで焼灼することが多かったです。色素性母斑も大きいと治療時間がかかります。サージトロンでの治療は大幅な時間短縮を可能とし、術後の経過も良好です。



施術前

施術後

2) 60歳 女性、左眉毛内側色素性母斑

サージトロンでドーム状に隆起した色素性母斑を切除する場合は、熱損傷による組織ダ

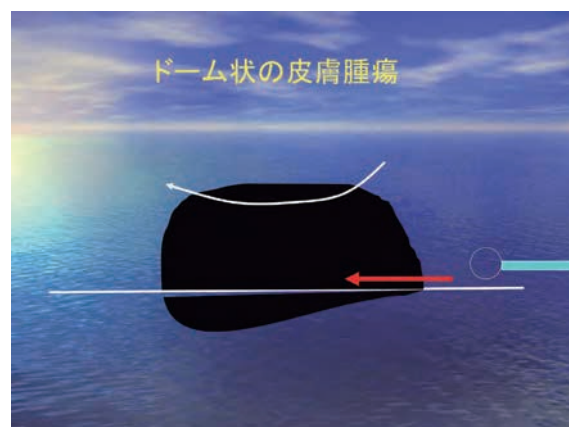
メージを考慮して、フラットではなくわずかに盛り上がりを残す程度に切除するのがよいでしょう。



施術前

施術後

また腫瘍の底から下記図のように切除アプローチすることで、組織が蒸散せず、病理組織検査に提出することができます。



3) 79歳 女性、右下眼瞼 脂漏性角化症

サージトロンの焼灼モード（ボール電極を使用）で腫瘍を焼灼します。この症例ではコンタクトレンズを装着しましたが、慣れれば不要です。炭酸ガスレーザーと違い、ハンドピースによる操作なので眼瞼部でも安心、安全です。